第６章　点字表記法の体系的学習

第２章に述べた点字学習の基本的な考え方に基づいて、前章までに点字学習のレディネスの形成や動機付けの課題、点字学習の基礎となる触運動の統制や触覚による弁別学習、両手読みの動作や触読の学習、点字の読み書きの学習への導入などについて取り上げてきた。

そこで、本章では、点字の五十音等の文字の読み書きは習得できていることを前提に、点字の仮名遣いや語の書き表し方、マスあけの仕方、句読符号の使い方、文章の書き方などについて述べることにする。

点字は、一つのマスに６つの凸点が、縦に３点、横に２列並んで構成されている。６つの凸点の組み合わせは、点が一つもない場合も含めて 64 通りしかないが、前置点を付けることで濁音や半濁音・拗音などを表し、同じ点の組み合わせを、仮名だけでなく、数字やアルファベットにも用いている。ほかにも、楽譜や記号類・マーク類にも対応している。

点字で学習する児童生徒が正確に点字を表記することができるようになるためには、文字そのものの書き方はもちろん、記号類やマーク類などの書き方・使い方といった点字の表記を体系的に学習することが重要である。点字で学習を始めたころの盲児童は、自分や友達の名前の点字を見つけては喜び、点字タイプライターで自分で考えた模様などを書いて見せてくれるといった様子も見られる。自分で読み書きできる文字を獲得していく過程を大切にして、著作教科書や本を読んだり、ノートや作文などを書いたりするなかで、正しい点字の表記を習得し、望ましい表記の仕方が定着するよう繰り返し丁寧に指導していく必要がある。また、盲児童生徒が興味をもって学習に取り組むことができる題材や語を用いたり、ICT 機器を活用したりすることも大切である。

なお、本章の点字の表記についての記述は、日本点字委員会の『日本点字表記法 2018 年版』を典拠としている。『日本点字表記法』については、今後も改訂されていくことが想定され、指導においては留意しておく必要がある。

第１節　語の書き表し方の学習

１　基本的な仮名遣い

現代の口語文で、和語や漢語を仮名文字（主として平仮名）で書き表す場合、「現代仮名遣い」（昭和 61 年７月１日付け内閣告示第１号）がそのよりどころとなっている。

点字の基本的な仮名遣いも、この「現代仮名遣い」にほぼ対応しているが、点字は平仮名や片仮名と同じ表音文字であり、発音する通り表記することになっており、助詞の「は」「へ」を点字では「ワ」「エ」と書き表すことと、ウ列とオ列の長音のうち、「う」と書き表す長音部分を、点字では長音符を用いて書き表すことの２点が異なっている。前者は、発音通りであるため盲児童生徒の理解を得やすいと思われるが、長音表記については丁寧に指導する必要がある。

(1) 長音

ア　ア列・イ列・エ列の長音

ア列・イ列・エ列の長音は、各列の仮名にそれぞれ「ア」「イ」「エ」を添えて書き表す。

（例）オカアサン（お母さん）　　オバアサン（おばあさん）
　　オニイサン（お兄さん）　　オジイサン（おじいさん）
　　オネエサン（お姉さん）　　ネエ（ねえ）　　エエ（ええ）

「時計」「先生」「丁寧」などは、エ列の長音として発音されるか、「ケイ」「セイ」「ネイ」のように発音されるかにかかわらず、「現代仮名遣い」と同様にエ列の仮名に「イ」を添えて書き表す。

発音通りに表記することを強調すると、「トケエ」「テエネエ」「センセエ」といった表記の誤りとなりかねないので、注意しなければならない。

（例）エイガ（映画）　　ジツレイ（実例）　　セイト（生徒）
　　セイクラベ（背比べ）　　メイレイ（命令）
　　ハルメイテ（春めいて）　　マネイテ（招いて）

イ　ウ列・オ列の長音

ウ列・オ列の長音のうち、「う」と表記される長音は、長音符（⠒）を添えて書き表す。助動詞の「う」やウ音便にも長音符を用いる。

なお、「思う」「食う」「吸う」「言う」などは、動詞の語尾で長音ではないので、長音符は用いず「ウ」を用いる。

（例）フーセン（風船）　ユーヒ（夕日）　ギューニュー（牛乳）
オーサマ（王様）　イモート（妹）　サトー（砂糖）
アソボー（遊ぼう）　タベヨー（食べよう）
オサムー⠀ゴザイマス（お寒うございます）
ウレシュー⠀ゾンジマス（うれしゅう存じます）
オハヨー（お早う）　イトーナイ（痛うない）

ウ　「オ」を添えるオ列の長音

オ列の長音のうち、次のような語とその派生語は、「現代仮名遣い」と同様に、オ列の仮名に「オ」を添えて書き表す。これらは、歴史的仮名遣いではオ列の仮名に「ほ」または「を」が続くものである。

正しい表記が定着するよう繰り返し丁寧に指導する必要があり、例えば、「トオクノ　オオキナ　コオリノ　ウエヲ　オオキナ　オオカミガトオッタ」（「かな文字の教え方」〈出版：むぎ書房　著：須田清〉）などと盲児童生徒と一緒に唱えたり、文を作ったりしながら楽しい雰囲気で学習できるよう工夫する。

（例）オオカミ（狼）　オオセ（仰せ）　オオヤケ（公）
コオリ（郡）　コオリ（氷）　コオロギ（こおろぎ）
ホオ（頬）　ホオ（朴）　ホオズキ（ほおずき）
ホノオ（炎）　トオ（十）　イキドオル（憤る）
オオウ（覆う）　コオル（凍る）　シオオセル（しおおせる）
トオル（通る）　トドコオル（滞る）　モヨオス（催す）
イトオシイ（いとおしい）　オオイ（多い）
オオキイ（大きい）　トオイ（遠い）　オオムネ（おおむね）
オオヨソ（おおよそ）

(2) 助詞「を」「は」「へ」

助詞「を」は、墨字と同様に「ヲ」と書き表すが、助詞の「は」「へ」は、点字では発音するとおりに「ワ」「エ」と書き表す。

（例）ジヲ□カク（字を書く）　　トワ□イエ（とはいえ）
　　ハハエノ□タヨリヲ□カク（母への便りを書く）

(3) 同音の連呼、連濁

「ちぢむ」「つづく」のように同音の連呼による濁音の場合や、「ハナヂ（鼻血）」「ミカヅキ（三日月）」のように２語の連合によって「ち」「つ」で始まる言葉が濁音化した場合（連濁）は、点字でも「ヂ」「ヅ」を用いて書き表す。

（例）チヂコマル（縮こまる）　　チヂマル（縮まる）
　　ツヅキ（続き）　　ツヅマヤカ（約まやか）　　ツヅミ（鼓）
　　ツヅム（約む）　　ツヅル（綴る）
　　ソコヂカラ（底力）　　イレヂエ（入知恵）
　　ユノミヂャワン（湯飲み茶わん）　　マヂカ（間近）
　　オコヅカイ（お小遣い）　　テヅクリ（手作り）
　　コヅツミ（小包）　　ハコヅメ（箱詰め）　　カタヅク（片付く）

ただし、「イチジク（無花果）」や「イチジルシイ（著しい）」「ケンチジ（県知事）」のような語は同音の連呼ではないので、「ヂ」「ヅ」を用いない。

また、「世界中」「稲妻」「絆」「うなずく」「訪れる」「黒ずくめ」「融通」のような語は、現代語の意識では一般に２語に分解しにくいもので「ジ」「ズ」を用いて書き、「地面」「布地」「図画」「略図」なども、同音の連呼や２語の連濁ではなく、漢字の音読みでもともと濁っているものであるので、「ジ」「ズ」を用いて書くことになる。

「ジ」「ズ」「ヂ」「ヅ」等を含む語について、表記を迷った場合には、国語辞典で表記を確かめることも大切である。このような機会を捉えて、日常的に国語辞典などを活用する習慣を養っておくようにする。

２　その他の仮名遣い

(1) 外来語、外国語

外来語や仮名で書き表される外国語、外国の地名や人名を点字で書き表す場合は、「外来語の表記」（平成３年６月 28 日付け内閣告示２号）に基づいて書き表す。必要に応じて特殊音点字も用い、長音は、長音符を用いる。指導上留意しなければならないのは、この外来語や外国語の長音表記が、一般の口語文中の和語や漢語に波及しないようにすることである。

（例）⠪⠥⠏⠥⠞⠁（コンピュータ）　⠚⠫⠈⠊⠗（ジェット機）
⠉⠓⠑⠗⠗⠽（チェリー）　⠋⠁⠊⠇（ファイル）
⠋⠊⠛⠥⠗⠑（フィギュア）　⠋⠑⠝⠉⠊⠝⠛（フェンシング）
⠉⠁⠝⠙⠊（キャンディ）　⠏⠗⠕⠙⠥⠉⠑⠗（プロデューサー）
⠺⠑⠞⠀⠞⠊⠎⠎⠥（ウェット　ティッシュ）
⠺⠕⠅⠊⠝⠛（ウォーキング）　⠅⠥⠊⠝（クィーン）
⠉⠓⠑⠎⠞⠕⠝（クェスチョン）　⠛⠥⠁⠞⠑⠍⠁⠇⠁（グァテマラ）
⠧⠑⠗⠎⠁⠊⠥（ヴェルサイユ）　⠞⠥⠍⠕⠗⠗⠕⠺（トゥモロー）
⠊⠝⠞⠁⠧⠥⠑⠗（インタヴュー）

(2) 擬声語、擬態語、嘆声、方言など

擬声語や擬態語、嘆声、方言などは、できるだけその発音に近い仮名を用いて書き表す。これらの表記も、一般の和語や漢語に波及して、長音表記が乱れないよう指導には留意する。なお、該当する特殊音点字がない場合には、それに近い音を表す点字仮名を用いる。

（例）ザーザー　キーキー　ピューピュー　メーメー
ゴーン　ズシーン　アーア　ギャオーッ　シーン
シェンシェイ（しぇんしぇい〔先生〕）
サムク⠀ナッタズオン（寒くなったずおん）
「ひぁーったまげた」　→　「ヒャーッ⠀タマゲタ」
「ヒアーッ⠀タマゲタ」

(3) 古文

古文の点字の基本的な仮名遣いは、和語は歴史的仮名遣いで書き表し、漢語は現代語に準じて書き表すことを原則とする。

現代仮名遣いで助詞の「は」「へ」は、点字では「わ」「え」と発音通り

に書き表すが、歴史的仮名遣いでは、そのまま「は」「へ」と書き表すことになる。また、ワ行の「ゐ」「ゑ」も用いて書き、長音符は使わない。歴史的仮名遣いでは小書きしないので、促音も促音符を使わず「ツ」をそのまま用い、拗音点字も使わないことになる。

ただし、文語文法は現代文の文法とは異なる部分があるので、注意が必要である。

（例）イマハ⠀ムカシ（今は昔）　　オモフ（思ふ）　　ヲトコ（男）
ユフガホ（夕顔）　　ヒイフツト（ひいふつと）
スエ（末）　　オホキミ（大君）
センザイ（前栽）　　セチエ（節会）　　ソーズ（僧都）
⠀⠀⠼⠁⠠⠼⠵ズンバカリナル⠀ヒト⠀イト⠀ウツクシウテ⠀キタリ⠼⠄
（三寸ばかりなるひといとうつくしうてゐたり。）
⠀⠀サスガニ⠀ヘンドノ⠀イフー⠀ワスレザルモノカラ⠼⠂⠀
シュショーニ⠀オボエラル
（さすがに辺土の遺風忘れざるものから、殊勝に覚えらる）

(4) 漢文

点字では、漢文は訓読文ではなく、書き下し文に直して書き表す。

漢文を、墨字の訓読文のように書き表す際に用いる点字の訓点符号もあるが、漢語の構造や漢詩の字数、助字の存在などを明らかにする場合などに用いるものであり、点字の漢文の学習は書き下し文による。

（例）アル⠀ヒト⠀イハク⠀⠼⠁⠠⠼⠵シノ⠀ホコヲ⠀モツテ⠀シノ⠀タテヲ⠀
トホサバ⠼⠂⠀イカン⠼⠁⠠⠼⠵ト⠼⠄

（或（あるヒト）　曰（ハク）　「以（テ）二　子　之　矛（ヲ）一、　陷（とほサバ）二　子　之　盾（ヲ）一、　如（いか）　何（んト）。」）

3　数字やアルファベットなどを用いた語の書き表し方

点字では、数字やアルファベットは数符や外字符を前置することによって、仮名と同じ形を数字やアルファベットに読み替えている。

(1) ひとまとまりの数

ひとまとまりの数は、数符（⠼⠁⠠⠼⠵）を前置して４桁までは数字で続けて書き、「万」「億」「兆」などの位は、４桁までの数字の後ろに仮名で書き表

す。千の位で終わる数は「セン」と仮名で書いてもよい。

（例）⠼⠃⠚⠉⠓ （2023）　⠼⠑⠚⠚⠚ （五千）

⠼⠃⠉⠙⠑⠋⠛⠓⠀⠼⠉⠙⠑⠋⠛⠓ （2345 万 6789）

表などで、大きな数字をすべて数字で表す必要がある場合には、後ろから３桁ごとに位取り点を添えて書き表す。

（例）⠼⠁⠃⠂⠉⠙⠂⠑⠋⠂⠛⠓⠂⠊ （123,456,789）

(2) 小数・分数

小数は小数点を用い、分数は一般書では読み上げる順に分母から書き、一マスあけて分子を書き表す。

（例）⠼⠁⠂⠃⠑ （1.25）　⠼⠉⠙ブンノ⠀⠼⠃⠉ （$\frac{2}{3}$）

(3) およその数など

「二、三（⠼⠃⠉⠼⠙⠉）」などのように、およその数で数字が重なるときは、それぞれに数符（⠼）を前置して続けて書き、読点や中点は省略する。重ね数字の点字の表記の仕方は、点字特有のものであり、読点や中点を用いないので効率のよい書き方でもある。

（例）⠼⠁⠙⠼⠃⠑ （十四、五）　⠼⠛⠼⠓マン（七、八万）

⠼⠛⠉⠼⠓⠀⠼⠙⠑⠼⠛⠓⠼⠉ （四百五、六十人）

この重ね数字の表記は、「⠼⠃⠁⠼⠃⠁⠀ジケン（２・26 事件）」や「⠼⠑⠂⠼⠙⠀ウンドー（五・四運動）」のように、月と日の省略を表す場合も、数字を重ねて書き、数字の間の中点や読点は用いない。

(4) 二つ以上の数字が連なる語

二つ以上の数字が連なる語は、数字を重ねて書き表す。

（例）⠼⠛⠑⠉⠛⠉ （七五三）　⠼⠛⠙⠛⠙ジチュー（四六時中）

(5) １語中のひと続きに書き表す数字と仮名

１語中のひと続きに書き表す数字と仮名は続けて書くが、数字のあとの最初の仮名がア行かラ行であれば、数字と形が同じであるので、間に第１

つなぎ符（⠤）をはさんで書き、誤読を避ける。

（例）⠼⠉⠚⠼⠉⠚ネン（300 年）　⠼⠁⠤ワリビキ（３割引）

⠼⠙⠋⠼⠑⠤オク（456 億）　⠼⠁⠄⠁⠼⠊⠤リットル（1.8 リットル）

チュー⠼⠃⠄２カイ（中２階）　オ⠼⠁⠤カタ（お三方）

ゴ⠼⠁⠤ケ（御三家）　ジュ⠼⠑⠄⠤イ（従５位）

数字の後ろに助詞や助動詞が続く場合も続けて書くが、ア行かラ行で始まる助詞や助動詞との間には第１つなぎ符をはさんで書く。

（例）⠼⠉⠚⠼⠁バカリ（30 ばかり）　⠼⠃⠄⠉ニ⠀ナッタ（23 になった）

⠼⠑⠄⠤エ⠀トブ（５へ飛ぶ）　⠼⠁⠄⠛⠤ラシイ（十七らしい）

(6) 数字を含む語

数字を含む語の書き表し方は、数字で書き表す場合と、仮名で書き表す場合に分けられる。

一般的には、数量や順序の意味がある場合には数字を用いて書き、それらの意味が薄くなった慣用句では仮名を用いて書くことが多い。そのため、同じ文字の語句でも、数量や順序の意味の有無によって数字と仮名に書き分けることになる。こうした数字と仮名との使い分けは、単に書き分けの技能を身に付けるだけではなく、言葉についての感性を磨くことにもなるので大切な事項である。

（例）セカイ⠼⠁⠄（世界一）　⠼⠁⠤カン⠀⠼⠉⠚⠤オン（三寒四温）

イッパン（一般）　ズイイチ（随一）　アオニサイ（青二才）

⠼⠁⠄⠤エンダマ（１円玉）　カントー⠀イチエン（関東一円）

ソバ⠀⠼⠁⠄パイ（蕎麦一杯）　シアワセ⠀イッパイ（幸せ一杯）

⠼⠁⠄バンニ⠀ナッタ（1 番になった）

イチバン⠀オオキイ（一番大きい）

漢数字の形を表している場合などは仮名で書き、アラビア数字の形を表している場合などは数字で書くことになっている。

（例）マイチモンジ（真一文字）　ジュージロ（十字路）

⠼⠙⠋ノジガタメ（４の字固め）

(7) 和語で読む数

数量または順序を表す語でも、和語の場合には発音するとおりに仮名を用いる。

（例）ヒトツ（一つ）　　フタリ（二人）　　ヨッカ（四日）
　　ムツボシ（六つ星）　　ミソカ（三十日　晦）　　ヤチヨ（八千代）
　　⠼⠃ヒャク⠀トオカ（二百十日）

和語で発音されても漢字音の並びに入っているものは、発音が和語と同じでも数字で書き表す。

（例）⠼⠉⠼⠙カ（三、四日）　　⠼⠃⠼⠙カ（24 日）
　　⠼⠙ジョーハン（４畳半）　　⠼⠛カイ（７階）

(8) 固有名詞に含まれる数

人名や地名（地番などを除く）、団体名や会社名などの固有名詞は、意味の理解を妨げない限り、仮名で書き表すことを原則とする。

（例）イチロー（一郎）　　シコク（四国）
　　ナオキ⠀サンジューゴ（直木三十五）

固有名詞のうち、地番など、数量や順序の意味を明らかにする必要のある場合は、数字を用いる。

（例）ルイ⠀⠼⠁⠼⠙セイ（ルイ 14 世）　　⠼⠉⠼⠉ゲンドー（三十三間堂）
　　⠼⠁チョーメ⠀⠼⠉バンチ（１丁目３番地）

(9) 文字や略称を書き表すアルファベット

文字として用いるアルファベットには、外字符（⠰）を前置する。略称などで２文字以上の場合も、一つの外字符に続けて書く。その時、それらのアルファベットが大文字である場合は、外字符の後に大文字符（⠠）を付け、ひと続きに書き表すアルファベットがすべて大文字の場合は、二重大文字符（⠠⠠）を付けて書き表す。

また、略称では中点を用いず、ピリオドは省略してもよいが、ピリオドを省略しない場合は、一つの外字符の後ろに続ける。

（例）⠰⠁（ａ）　　⠰⠎⠝⠎（SNS）
　　⠰⠎⠁⠙⠀サイズ（Ａ４サイズ）

⠰⠠⠠⠥⠎⠁（U.S.A.）　　⠰⠠⠠⠥⠲⠎⠲⠁⠲（U.S.A.）

なお、大文字列の略称などの後ろに複数を表すｓなど小文字が付いている場合、改めて外字符を前置して書いてもよい。

⠰⠠⠠⠝⠊⠑⠰⠎（NIEs）　　⠰⠠⠠⠎⠙⠛⠰⠎（SDGs）

（10）１語中のひと続きに書き表す数字とアルファベット

１語中のひと続きに書き表す数字とアルファベット、またはアルファベットと数字の間は、続けて書き表す。それぞれの前置符号があり、誤読されることはないからである。

（例）⠰⠏⠼⠁⠚⠑（p105）　　⠰⠠⠏⠼⠉⠰⠠⠉（P3C）

⠼⠃⠰⠠⠠⠇⠙⠅（２LDK）　　⠼⠉⠰⠠⠙□エイゾー（３Ｄ映像）

（11）１語中のひと続きに書き表す仮名とアルファベット

１語中のひと続きに書き表す仮名とアルファベットの間は続けて書き、アルファベットと仮名との間は第１つなぎ符（⠤）をはさんで続けて書き表すことを原則とする。これは、アルファベット 26 文字すべてが仮名と同じ形であるため、すべてのアルファベットの後ろで第１つなぎ符が必要になるのである。

また、アルファベットの後ろに助詞や助動詞が続く場合は、第１つなぎ符（⠤）をはさまずに、一マスあけて書き表す。

（例）スー⠰⠅⠛（数ｋｇ）　　ハツ⠰⠠⠧（初Ｖ〈初勝利〉）

⠰⠠⠞⠤ジロ（Ｔ字路）　　ギャク⠰⠠⠧⠤ジガタ（逆Ｖ字型）

⠰⠠⠠⠺⠓⠕⠤テキ□ハッソー（WHO 的発想）

⠰⠠⠠⠏⠞⠁□ノ□ソーカイ（PTA の総会）

⠰⠠⠠⠊⠎⠕□エノ□テイアン（ISO への提案）

ドーヤラ□⠰⠠⠠⠥⠋⠕□ラシイ（どうやら UFO らしい）

（12）語句や文を書き表すアルファベット

語句や文を書き表すアルファベットを一般書の日本語文章中に書く場合には、原則としてその前後ろを外国語引用符（⠦～⠴）で囲む。外国語引用符の内側は続けて書き表し、外側は分かち書きの規則や表記符号の用法に従うが、閉じ符号の後ろに仮名や数字を続けてはいけない。また、外国

語引用符の後ろに助詞や助動詞が続くときは、一マスあける。
（例）テンジノ⠀コトヲ⠀エイゴデワ⠀⠐⠐⠐⠐⠐⠐⠐⠐⠐⠐⠀ト⠀イウ⠐
（点字のことを英語では braille という。）

１語中にひと続きに書き表す英単語などが含まれている場合は、外国語引用符の前の仮名とは続け、後ろの仮名との間には第１つなぎ符（⠐）をはさんで続けて書くことを原則とする。
（例）⠐⠐⠐⠐⠐⠐⠐ケン（gift 券）　ボン⠐⠐⠐⠐⠐⠐（凡 play）

外国語引用符と外字符とを混同して用いないように十分注意が必要である。例えば、同じ「WHO」であっても、世界保健機関の略称なら外字符を前置して書き表し、関係代名詞なら外国語引用符を用いることになる。

(13) ホームページ・メールアドレスなど

ホームページやＥメールのアドレス、SNS のアカウントなどを書き表す場合は、その前後をアドレス囲み符号（⠐⠐～⠐⠐）で囲む。

第２節　分かち書きの学習

漢字仮名交じり文では、漢字によって語の区切り目や意味のまとまりが比較的分かりやすくなっているため、分かち書きをしていない。これに対して、仮名で書かれている幼児用の本や、漢字があまり使われていない小学校低学年の検定教科用図書などのような文章は、文を読みやすくするために、語のひとまとまりごとに区切って、分かち書きされている。点字も仮名文字体系の表音文字であるため、語の区切り目を明らかにするために分かち書きをする必要がある。

点字の分かち書きについては、『日本点字表記法』において、次の二つの原則が記されている。

第１原則は、文節で区切るもので、「文節分かち書き」と呼ばれている。文節として区切る箇所は、語句の間に「ね」や「さ」「よ」の助詞を入れて文の意味が変わらないところと考えてよい。なお、指導においては、「文節」は中学校１年生の国語で学習するものであることに留意しておく必要がある。